秋田の平田門人と書物・出版

吉田　麻子

はじめに

平田篤胤とその塾である気吹舎について考える際、その思想が最も広く世に及んだ時期は幕末から明治にかけてである。だがそんな広範な影響力をもった時期に、当の篤胤は既に鬼籍の人であった。遺された気吹舎塾は嗣子鋭胤が中心となり家族や門人達によって支えられ運営されていくが、同時に塾の主柱である篤胤の思想と学問は「書物」や「摺り物」という形で全国へ流布し[1]、混沌とした社会情勢の中で人々を感化し、明治初期には四千人近い門人を獲得するに至るのである。

本稿ではそのような篤胤の著述や出版物についての社会史的解明を目指す中で[2]、特に篤胤が亡くなる前後の時期の気吹舎について取り上げたい。

一、秋田の国学史と篤胤

篤胤が死去するのは天保十四年閏九月のことである。その二年半ほど前に幕府から思想を咎められ故郷の秋田へと退去し、当地にて自説の講釈を始める。篤胤の国学講釈はかなり盛況であり[3]、それまでたった十四人しか門人のいなかったこの地において三年間で四十二人の入門者があった[4]。このあと篤胤没後にも入門する者があとをたたず、生前・

没後を合わせた門人総数は明治五年までに約三百人を数える。[5] これほどまでに多数の門人がいた事実からは、いわば平田学こそが秋田における思想史の中核をになってきたかのような印象をうける。

では、『秋田県史』や『秋田市史』といった先行の地域的な国学史研究には、平田篤胤や気吹舎門人についてどのように触れられてきたのであろうか。[6]

秋田において、近世の国学を学問的に定着させようと初めに努力したのは、国学者大友直枝である。直枝は藩校の中に和学方を設置し自らが教育の先頭に立つが、その努力もむなしく和学は衰退の一途をたどる。ついに病臥となった直枝の志を引き継いだのは吉川忠行とされるが、その後も特に和学自体が藩において盛り上がりを見せたという記録はない。そのような和学がいわば先細りの状況にあったときに、篤胤は江戸から追放され秋田へと帰還してくるのである。周知のとおり秋田は戊辰戦争の際、奥羽列藩同盟から離反した藩である。この歴史的な流れを考える場合に、篤胤が来たことが秋田における一つの思想的契機であり、その後、その影響を受けた吉川忠行・小野崎通亮・大和田盛胤を中心とした人々が秋田を復古思想へと導いたというのが、おおよそ、先行の秋田国学史研究の中で語られる、平田篤胤と気吹舎一門である。[7]

だがここで一番大きな問題となるのは、藩の教育としての「和学」というのは常にほとんど盛り上がってこなかったということである。藩の教育的土台にあったのは、あくまでも漢学である。大友直枝が「先ずもつて漢学に対して和学を単に歌学一遍のように考え」と当時の人々の態度を述べたように、[8] 和学は漢学に対峙するような思想的な学問としてはとらえられておらず、むしろ余技のごとくに軽んじられていたといえる。そのような地域において、篤胤の思想はどうやって定着したのであろうか。篤胤が秋田で国学講釈をしたのはたった二年あまりのことである。師亡き後も、気吹舎への入門者があらわれ、平田学が浸透し続けたというならば、それはやはり残された門人達による努力ゆえなのではないだろうか。篤胤が秋田に退去し亡くなった天保期から、吉川忠行が家塾をたちあげる安政期迄の間の、国学的土壌を形成した平田門人とその活動について考察していくこととする。

二、篤胤・鋭胤による講釈

平田学が秋田に浸透していった様相を知るために、まずは、篤胤が秋田に下った当初、講釈を聞きに集まったのが、どのような人々であったかということについて検討する。

次の表①と表②は天保十三年から同十五年までに、篤胤と鎮胤が秋田でおこなった講釈の参加者名簿[9]をもとに作成したものである。

表①

名前	門人帳記載	出席数	備考
荒川才吉		20	荒川宋十郎養子、小野崎権太夫弟、御番頭、渋江和光読書会参加
荒川久太郎		9	荒川秀種（秀李男）、神官、渋江家老の一族、礒野に漢学・吉川に国学を学ぶ
新田目小八郎		2	久保田在、藩士
新田目転	○（天保15）	15	天保13年中のみ
石川門八郎		4	久保田在、秋田藩種痘医、天保12年藩主義厚を冨樫三益と共に治療（『秋田県史』）
石川元長	○（天保13）	12	
石川久三郎		10	久保田在
石古川政吉	○（天保14）	49	天保13年中のみ
泉金十郎		33	天保14年中のみ
伊勢屋石五郎		2	六郷在（門人、丹石五郎か）
礒野貫一郎		16	能代在、儒学折衷学派、崇徳院詰役（文政13）から明徳館助教となる、久保田で家塾を開く（嘉永元）
岩谷（屋）新一郎		3	天保13年中のみ
宇佐美久太夫		8	天保14年中のみ
梅津亥蔵	○（天保14）	22	久保田在、主馬三男
梅津主馬	○（天保12）	38	久保田在、佐竹藩家老、小野岡大和弟、明徳館学長（文政9～10）
江間郡兵衛		6	天保13年中のみ、二千石取り藩士
越中屋庄兵衛		2	
遠藤儀助		5	
遠藤儀八郎		7	
近江屋藤兵衛		4	近江谷藤兵衛（俳人）か
近江屋良吉		4	
大越弥生		28	藩士、種々の年代記、道中双六等考案、「江戸道中双六」（嘉永6）
太田喜右衛門	○（天保12）	36	久保田在、大山隼人・駒木根又左衛門と共に学館（和学方）詰役
太田常蔵		2	
大友五百枝		2	
大野虎之助		10	
大山鉄多		6	
大山隼人	○（天保12）	27	久保田在、藩士、太田・駒木根と共に学館（和学方）詰役
大和田駒之助		7	
大和田正治	○（天保12）	44	盛胤、久保田在、雷風義塾開設（文久3）
大和田正八		27	
小笠原見龍	○（天保12）	59	久保田在、医師（歴博書簡2-1-4）、本取次役、神名日文伝
岡田升（昇）順	○（天保13）	18	久保田在
小沢清四郎		2	
源吾		2	子供
新吾		2	子供
小田部時弥		17	盛胤の親戚
小野崎要		2	
小野周助		2	

加賀屋正八		44		
梶山金治	○（天保14）	3	角館在	
柏屋文治		2	久保田在、藩士、小野岡氏家中	
片岡四方之助		34	角館在	
加藤勘兵衛		5	大友直枝門人、和学方初代学生、藩士	
加藤銀治（郎）		2		
加藤才治		2	加藤景琴、文筆家、篤胤親戚、明徳館に学び著書三十種あり、木山方吟味役	
加藤林蔵		3		
上曾直江		4		
亀田常三郎	○（天保14）	3	久保田在、総社神主	
川尻祝部		26	久保田在	
川村多一郎	○（天保14）	29	吉川忠行、和学方、惟神館開設（安政3）	
吉川久治		6	福地、とあり	
木村吉右衛門		10		
京野伝十郎		2		
桐油屋宇八		3		
鯨岡慶吉		3		
熊谷周蔵（直房）	○（天保12）	42	六郷在、熊野社神主、熊谷正司二男	
熊谷久蔵		3		
栗谷作右衛門		2		
小谷部宇八		2		
小谷部甚左衛門	○（天保14）	3		
小貫山吉五郎		10		
駒木根又左衛門	○（天保12）	22	久保田在、太田、大和田と共に学館（和学方）詰役	

斎藤平兵衛		2		
佐伯八兵衛		2		
桜田市蔵		4		
桜田市松		3		
桜田嘉兵衛	○（天保14）	47	久保田在	
桜田又治		2		
佐藤敬三郎		2		
佐藤慶（敬）二郎		2		
佐藤三左衛門		13	真坂村にて寺子屋開催（『日本教育史資料』第八巻）	
塩弥生		16		
渋江庄治	○（天保14）	44	光順、久保田在、渋江家老一族か	
渋江豊吉	○（嘉永3）	8	光世、久保田在、『古学二千文』序文中、助成者と記される	
東海林長吉		6		
東海林万蔵	○（天保14）	42	長吉、久保田在	
白土輪三郎	○（天保14）	58	久保田在	
進藤惣蔵		14		
菅原善兵衛	○（天保12）	6	仙北大巻村農民、本取次、『古学二千文』序文	
鈴木市之助		13		
鈴木小三郎		9		
鈴木府生	○（天保3）	7	重胤	
鈴木良助（輔）		2		
関岩尾		4		
妹尾玄養	○（天保14）	57	兼秀、久保田在、妹尾東七郎兼平男	
妹尾正吉		2		
高橋清右衛門		9		

高橋留(邑)蔵			22	
田宮仁左衛門			19	
丹惣十郎			25	
中川駒之助			4	
西野円左衛門			6	
野上喜六郎			7	
野口金一郎			12	
羽石文之助	○(天保12)		17	矢橋村在、医師(歴博書簡2-1-4)
平元勇一郎			2	
深谷亘	○(天保12)		17	矢橋村東照宮宮侍
布川三折	○(天保13)		61	小沢氏、久保田在、藩士、『古道大意』上木助成、医師(歴博書簡2-1-4)
舟(舩)木林左衛門			2	子供
星野文一郎			2	
福田新介			3	
福田新蔵			2	
福地慶蔵			8	
福原千九郎	○(天保14)		37	
堀藤治			6	飯塚村にて寺子屋開催(安政四年)(『日本教育史資料』第八巻)
三浦長兵衛			5	
三浦養順			2	
村山茂左衛門			2	
守屋左源司	○(天保12)		12	
八木九十郎			8	
淀川東市郎	○(天保13)		30	盛業、久保田在
淀川渡			14	

渡辺泰治			2	
渡辺東治			2	

表②

名前	門人帳	出席数	備考
伊藤勘解由	○(天保15)	5	伊藤主水男
伊藤重左衛門	○(天保15)	5	乙越村、伊藤主水紹介
伊藤主水	○(天保15)	5	強首村神明宮神主、菅原豊秋紹介
大友長七郎		4	門人坂口登(仙北郡角館在)弟子
小川清見		2	なら岡、とあり
加藤小三郎	○(天保14)	4	神明社祠官、白川家入門、明治4、村全体改宗
加藤惣右衛門	○(天保15)	3	北野目村
加藤長兵衛		2	湯野津村
九兵衛		2	
斎藤喜代輔	○(天保9)	3	六郷、諏訪社神主、寺子屋「教育堂」開催(『日本教育史資料』第八巻)
佐々木上総		3	佐々木清江父
佐々木清江	○(天保14)	5	北野目村、神明宮神主、村きっての学者
菅原善兵衛	○(天保12)	5	大巻村農民、本会開催会場、『古学二千文』序文、本取次
鈴木根之助		2	
伝兵衛		2	湯野津村
根之助		2	
久三郎		2	
茂助		2	
布川三折	○(天保13)	5	久保田、『古道大意』助成

淀川渡			
淀川盛業（東市郎）	○（天保13）	1	4	久保田にての講釈にも参加
				久保田にての講釈にも参加

表①は、秋田藩家老であった梅津家あるいは門人大和田邸（久保田城下）にて、篤胤自身（天保十四年閏九月以降は銕胤）によって六十七回にわたりおこなわれた講説会の参加者とその出席回数、身分や学問的背景などをまとめたものである。この表を一見して分かることは、参加者の特徴として荒川・梅津・渋江といった家老一族を中心とするかなりの上級藩士が多いということである。開催場所が、この梅津家であることからも、出席者の中心は藩士であり、また漢学を基礎としたかなりの教養があったことを窺わせる。梅津主馬は文政九年に藩校明徳館の学長になっており[10]、荒川才吉は家老であった渋江和光が開催していた経書の読書会に参加していたという記録がある[11]。また礒野貫一郎は明徳館で教鞭をふるった儒者であり[12]、荒川久太郎はこの礒野に漢学を学んだと言われている[13]。先述のように、藩の教育自体、和学よりも漢学が中心であり、他の藩士もおそらく漢学の素養が下地としてあったのではないかと考えられる。

一方で、和学的な素養がある人物もいる。表①にはたとえば大友直枝に学んだ吉川久治（忠行）、神官であり吉川に国学を学んだ荒川久太郎[14]、あるいは和学方開設時に初代学生となった片岡四方之助[15]の名前もみえる。藩校の和学方が衰退傾向にあった当時、江戸からきた篤胤の講釈会は、彼らにとっては願ってもない学習場所となっていたのかもしれない。

ただし全体的な傾向としては（現在のところこの参加者名簿にあがっているすべての人物の学問的背景を明らかにし得た状態ではないが）、講釈会が梅津家老宅で開催されていることや、この時期の秋田藩の学問的傾向を併せ考えても、やはり漢学的な素養が基礎としてある藩士を中心とした層がこの会の中心を成していたといえよう。

次に表②は、篤胤没後の天保十五年、銕胤が六郷にて門人を集め五日間にわたりおこなった講釈の出席者名簿をもとに作成した。

一見すると、この地域で講釈を聞いているのは神職者が中心であることが分かる（これら神職者は全員門人になっている。また、この地域でこの時講釈を聞きに来ていない門人にも神職者が多い）。加藤小三郎はのちに白川家に入門し、明治四年には村全体を神道に改宗させる[16]といった、指導者的な側面をもつ人物である。佐々木清江は「村きっての学者」[17]と伝えられ、また斎藤喜代輔も神職者であると同時に寺子屋をひらいていたという記録がある[18]。このように神職であると同時に学問的な指導者である人物が目立つ。

また、この地域の平田グループで、門人の紹介者となるなど様々な面でリーダー的存在だったのが、菅原善兵衛（豊秋）と熊谷周蔵いう二人の人物である。菅原善兵衛はこの時の講釈会場を提供しているほか、その後も江戸の気吹舎から本を取り次いだり、気吹舎蔵板である『古学二千文』を出版する際の助成者となるなど、[19]かなり精力的に気吹舎をサポートする。善兵衛は神職ではないが、大巻村の有力な農家であったらしく、[20]佐々木清江や伊藤主水など神主を紹介して入門させている。一方、熊谷周蔵も神職者で、門人を紹介し入門させているが、[21]六郷での講釈会には参加せず、いちはやく久保田で生前の篤胤の講釈を聴き学問を深めていた。この六郷という地域では、早くから平田学がひらけた、と梅津から鍈胤にあてた手紙[22]にもあるが、それは当初から平田学に興味を示し寄り集ってきていたのがおもに神職者であったことによるといえよう。

ところで、参加者名簿に名前がみえない人物を含め、これら久保田や六郷の門人達と儒学系統との関わりについても若干ふれておくことにする。秋田藩の漢学は、折衷学派と崎門学派との二系統が主流をなしている。[23]篤胤がおこなった講義参加者にはさきの磯野貫一郎などの折衷学派の儒者もみえるが、門人達の周辺には特に崎門学の影響が目立ってかいまみえる。たとえば六郷の斎藤喜代輔は諏訪社の神主であるが、同じく諏訪社神官であった父斎藤則庸は二十歳で崎門学派の儒者、中山菁莪に入門している。また熊谷周蔵の父、熊谷松陰（直清）や生前からの門人であった辻辰之助は同じく崎門学派の漢学者岩屋良兵衛の門人でもあった。[24]また小野岡・梅津・渋江といった重臣の一族にはやはり山崎闇斎の学統である浅見絅斎の流れをくむ落合東堤からの影響を色濃くうけたものがいる。[25]秋田における平田門人の学問的背景、特に儒学系統との関わりを今後さらに突き詰めて行く必要がありそうである。

では、このように数十回にわたっておこなわれ、大盛況をおさめた篤胤の久保田での講釈内容はどんなものであったのだろうか。天保十二年～天保十四年にかけて、篤胤・織瀬夫妻（秋田）から江戸で気吹舎を守っていた平田鍈胤に向けて送られた書簡の内容から、講釈に使用されていたと考えられる篤胤の著述を表③のようにまとめた。[26]

表③

書名	根拠とした史料
古史成文	2-1-5（天保十三年六月廿日）
赤県太古伝	2-1-5（天保十三年六月廿日）
玉襷	3-15-1～2（天保十三年八月六日）
霊能真柱	2-1-6（天保十三（十四年か））
巫学談弊	渡辺金造『平田篤胤研究』七七五～七七六頁（天保十四年二月十二日）

『古史成文』『玉襷』『霊能真柱』は、平田学を学ぶための基本的な書物である。これらは、篤胤が門人を獲得する際、あるいは入門したばかりの初学者たちにかならずおこなう基礎的な講釈であった。篤胤は文化・文政期、のちに気吹舎の最も重要な門人集団地域の一つとなる下総を巡遊し、精力的な門人拡大活動をおこなうが、その際おこなわれた講釈も、同様に『古史成文』や『玉襷』、『霊能真柱』などであった。[27] 篤胤が『日本書紀』や『古事記』などさまざまな古典から正しい古史を選定した『古史成文』や、天地の成り立ちと霊魂の行方を論じた『霊能真柱』は、篤胤が考える神代のありようを初学者に体系的に伝える基本的な講義内容であった。

ところで秋田での講義で、下総の場合と異なるのは、『赤県太古伝』が『古史成文』と共に講義されていることである。『赤県太古伝』とは、中国が実は日本の神々によって開闢したということを中国の古史をひいて説く書物である。先述のように、久保田での講釈会の中心を成しているのは、漢学を基礎とした知識をもつ藩士達であった。つまりそのような聴衆に対し、『赤県太古伝』によって中国の古史の正当性を論駁し、その前提となるべき『古史成文』という日本の神の系譜と日本古代史の成立論を説くことで、これまでの中国への尊崇を改めさせ、日本の優位性を確認させようという意図がこめられていたのであろう。それは神職をおもな対象としていた下総の場合とは異なり、藩校の中心的学問であった儒学を基礎とする秋田藩士達への意識的な講義内容であったといえる。

さて、講釈会では部屋に入りきらないほどの人数が集まったといわれるが、ここで妻の織瀬は篤胤の著述を聴講者や門人に対して積極的に販売することで、そこから得られた資金を有力門人からの借金返済に充てたり、江戸の銕胤へ送ったりしていた。書物は、当時経済的に困窮していた気吹舎の大事な収入源であったといえるが、一方で、具体的にどんな著述が販売されたのかを知ることは、やはり、秋田門人達がどのように平田学を摂取していったかを考える手がかりとなるだろう。先と同様の方法で、秋田の織瀬から江戸の銕胤に宛てて送られた書簡の中から、織瀬が送付を願っている著述名を抜粋し表④にまとめた。[28]

表④

書名	根拠とした史料	備考
古史成文	①6-2-8（天保十二年正月廿六日 ②2-1-20（天保十三年四月三日） ③7-1-11（天保十三年十二月六日）	②に「拾部」③に「三部程」とあり
古史徴	①2-1-20（天保十三年四月三日） ②6-2-8（天保十三年正月廿六日）	①に「こしてう、うり本四部」とあり

古史徴開題記	①10-13(天保十二年六月五日)②10-23(天保十二年九月十八日)③2-1-20(天保十三年四月三日)④2-1-6(天保十三年六月廿日)⑤7-1-11(天保十三年十二月六日)	④に「三部」⑤に「弐部程」とあり
玉　襷	①10-13(天保十二年六月五日)②10-23(天保十二年九月十八日)③10-19-2(天保十二年)④2-1-20(天保十三年四月三日)⑤2-1-6(天保十三年六月廿日)	③に「六郷の斎藤喜代助へ」④に「梅津様へ上候」⑤に「三部」とあり
霊能真柱	①10-13(天保十二年六月五日)②10-23(天保十二年九月十八日)③6-2-1(天保十三年三月十四日)④2-1-20(天保十三年四月三日)⑤2-1-16(天保十三年七月六日)⑥5-1-9(年不明八月十六日)	③に「三部程」⑥に「三部」とあり
宮比神御肖像	①6-2-8(天保十三年正月廿六日)②6-2-13(天保十三年二月五日)③7-1-11(天保十三年十二月六日)	
宮比神御伝記	①10-13(天保十二年六月五日)②6-2-13(天保十三年二月五日)③2-1-6(天保十三年六月廿日)④7-1-11(天保十三年十二月六日)⑤2-1-16(天保十三年七月六日)⑥5-1-9(年不明八月十六日)	①に「少々」③に「拾部程」⑥に「大入用」とあり
大祓詞正訓	①10-13(天保十二年六月五日)②7-1-11(天保十三年十二月六日)	①「三部でも五部でも」②に「拾部程」とあり
毎朝神拝詞記	①10-13(天保十二年六月五日)②10-23(天保十二年九月十八日)③6-2-13(天保十三年二月五日)④2-1-20(天保十三年四月三日)⑤2-1-16(天保十三年七月六日)⑥7-1-11(天保十三年十二月六日)⑦2-1-6(天保十三年六月廿日)⑧5-1-9(年不明八月十六日)	③に「上の口壱部、つぎのも今壱つニなり候間おこし可被下候」④に「弐朱のを壱つ」「壱朱の口五部」⑤に「壱朱、四十部」⑥に「上神拝しき……五部程おねかひ」⑧に「弐、三百部も入用に御座候」とあり
天満宮御伝記略	①10-13(天保十二年六月五日)②10-23(天保十二年九月十八日)③6-2-8(天保十三年正月廿六日)④6-2-13(天保十三年二月五日)⑤2-1-6(天保十三年六月廿日)⑥2-1-20(天保十三年四月三日)⑦2-1-16(天保十三年七月六日)	①に「少々」④に「三ツ」とあり
学神号石摺(がくもんの神様石摺)	①6-2-8(天保十三年正月廿六日)②10-23(天保十二年九月十八日)	
大扶桑国考	①2-1-6(天保十三年六月廿日)②2-1-20(天保十三年四月三日)③7-1-11(天保十三年十二月六日)	①に「弐部」とあり
古道太元顕幽分属図説	①6-2-13(天保十三年二月五日)②2-1-20(天保十三年四月三日)③2-1-6(天保十三年六月廿日)④3-20(年月日不明)	①に「太元のつ、たくさん」②に「大はやり」③に「百枚」④に「弐、三人ほしかり候者御座候」とあり
医宗仲景考	①5-1-9(年不明八月十六日)②7-1-11(天保十三年十二月六日)	
三五本国考	7-1-11(天保十三年十二月六日)	
天津祝詞考	2-1-16(天保十三年七月六日)	
草木撰種録	①7-1-11(天保十三年十二月六日)②5-1-8(年不明八月十五日)	①に「とし玉に致度候」②に「十枚」とあり

陰陽神石図	6-2-13（天保十三年二月五日）	
天説弁々	2-1-16（天保十三年七月六日）	
三大考辨々	2-1-16（天保十三年七月六日）	
しもとのまにまに	2-1-16（天保十三年七月六日）	

織瀬が江戸に対し、送付を願っている著述は、ほとんどがこの時点で板本になっているものである。当時刊行されていた著書は、ほぼ一通り要求されているともいえる。しかし、その頻度や冊数などを比較すると、『毎朝神拝詞記』の需要が圧倒的に高かったようだ。『毎朝神拝詞記』は平田学を学ぶにあたり、必ず日々拝すべき神々とその詞を記したものである。いわば宗教的な側面で必要不可欠な書であり、この地域に限らず気吹舎出版全体を通して、最もよく売れた書でもあった。篤胤生前の秋田では、第一にこのような、信仰の実践的な側面において必要な著述の需要が高い。『宮比神御伝記』『同御肖像』『大祓詞正訓』などもそのたぐいである。『宮比神御伝記』には宮比神を信仰する際の拝式が付録として載る。また一枚刷り『御肖像』[29]は、宮比講を実践する際に床の間に掛け拝するためのものであった。初学者たちが最も初期に必要とした著述が、このような祭祀に必要なものであったという事実からは、やはり平田学とは、文献的知識の摂取と同時に信仰の実践が不可欠であったということを物語っている。

一方で『古史成文』『古史徴開題記』『玉襷』『霊能真柱』や『太元図』（一枚刷り）が何度も送付を請われているが、これらは篤胤がおこなっていた講義との関連性が考えられる。『古史成文』『玉襷』『霊能真柱』が講釈に使用されていたのは先述の通りである。『古史徴開題記』は『古史成文』における古史選定理由を詳細に解き明かしたものであるし、一枚刷りの『太元図』は『霊能真柱』の内容理解を補い助ける役割をもつ。これらは平田学を学ぶためのテキストとして需要があったのであろう。特に『太元図』は「百枚」あるいは「たくさん」送付を要求されているが、板本よりも安価な摺り物は比較的手に入れやすかったのかもしれない。また摺り物は販売目的以外に、進上物として必要だったとも考えられる。[30]『草木撰種録』を「とし玉」にしているというのもその例である。

三、篤胤没後の平田門とその活動

こうして生前の篤胤から直接講義を受け、入門し、書物や刷り物を購入しながら学を深め、気吹舎に傾倒していった門人たちは、その後、平田学普及活動を熱心にひっぱっていく秋田の代表門人となっていく。この時点で、いわば平田学の種が篤胤や鋭胤によって当地に蒔かれ、萌芽し始

めたといってよい。しかし、篤胤が亡くなり、銕胤が江戸へ帰ってしまった当初、漢学が主流の地であった秋田において、状況的にはそれほど恵まれたものではなく、残された気吹舎門人たちは非常に心細い状況であった。銕胤が江戸へ帰ってしまった時の心情を梅津主馬が弘化元年四月十六日付の書簡[31]で次のように綴っている。

御出立後は何事も打止ミ候様にて寂莫とのミ罷在候、右等ニ付候ても学事なとの衰廃にも相至可申やと心元なき事のみに御座候

そもそも藩の学問として大友直枝が国学をおこそうとしてもうまくいかなかったような土地である。篤胤という教祖もなく、銕胤という講師も帰ってしまったいま、平田学が当地にて存続していけるのかどうかは、むしろ危うい状態だったのではないだろうか。

では、そのような篤胤なき秋田で、のこされた平田門人達はその後どのように活動を続けたのか、平田学を広めるため、あるいは自分達が学問を深めていくために主要門人たちのおこなった具体的な活動について考察してみたい。次の史料①は、外部から平田家への入金記録『金銀入覚帳[32]』の中から、仮に、篤胤が亡くなり銕胤が江戸へ帰った後の弘化二年から嘉永二までに、秋田から書物代（あるいは書物彫刻料）として送られてきたとされる部分の抜粋である。

史料①『金銀入覚帳』より

弘化二年
二月十四日　壱両、布川より届く
四月二十一日　七両弐分也、秋田より書物代
八月十五日　弐両、秋田見龍書物代
十一月　三両、布川より
十一月　壱両弐分、小笠原より
十一月十二日　壱分弐朱、秋田書物料
十一月二十四日　壱両三分弐朱、秋田書物料
十一月二十四日　四両弐分、秋田より書物料
弘化三年
二月十八日　壱分弐朱、（小野岡）書物料
三月二十二日　弐両也、秋田本代
同月同日　弐分弐朱也、同本代
閏五月二十二日　弐分弐朱、秋田書物料
閏五月二十二日　弐両三分、小笠原より書物代
閏五月二十二日　拾両也、秋田布川より
七月晦日　弐両弐朱、秋田書物代
弘化四年
正月十五日　三両三分　書物代、新田目
八月十一日　壱両壱分　書物代、小笠原より

八月十一日　壱両弐朱　書物代、斎藤喜代助
霜月廿八日　五両　布川より
十二月十五日　五両　（布川）三折より
嘉永元年
四月十五日　四両　書物代、小笠原
六月晦日　三両　てうこく、布川三折
七月廿七日　壱分新こく書物代、新田目より
八月二十二日　八両　書物代、小笠原
嘉永二年
二月二十九日　三両　書物代、小笠原より
三月　壱両　書物代、小笠原より
閏五月十一日　五両　書物代、小笠原より
六月十日　弐両　書物代、小笠原より
九月十一日　三両　書物代　小笠原より

まず第一に弘化三年閏五月二十二日に「拾両」とあるように、何度かにわたり、かなりの金額を「布川」が気吹舎へ送っている。これは嘉永元年に新刻される『古道大意』の彫刻助成金である。『古道大意』は平田学の初歩的な概要を平易な言葉で綴った、いわば初学者向けテキストである。この彫刻に秋田久保田の門人である布川三折が資金を助成していたのである。当時、秋田の平田門人は火の車であった気吹舎の経済状態を支える重要なサポーターであったが、初歩的な平田学テキストともいうべき『古道大意』を秋田門人の助成によって刊行されたことは興味深い。

第二に「小笠原」という人物が秋田門人達の書物をどうやら一括して取り次いでいることが分かる。小笠原は、小笠原見龍という門人である。見龍は町医師であったということ以外に現在のところ未詳であるが、平田門の場合、あるまとまった門人集団がいる地域で、代表門人がまとまって書物を取り次いでいる場合に、その人物を中心に知的コミュニティー（平田学を学ぶための学習会）が組織されている場合が多い。例えば、飯田における岩崎長世、奥州の高玉民部、三河の羽田野常陸といった門人達が代表格である。よって、この場合もかなり頻繁に書物を購入していることから、篤胤没後、おそらくこの小笠原見龍が中心となった平田学を学ぶ学習会が秋田久保田にあったことを推測させるのである。また、弘化二年八月二十一日『気吹舎日記』には、気吹舎新刊の『古今妖魅考』を秋田で五十部一括購入している記事がある。[33] このように秋田門人たちは、師亡き後も、篤胤の口演をそのまま収めたとされる初学者向けのテキスト『古道大意』刊行を助け、また自ら江戸の気吹舎から本を取り寄せて平田学を学ぶという自主的な活動を続けていたのである。

更に、そのような門人達の自主的かつ集団的な学習活動

は、自分達の学問を高めていくためだけにおこなわれたのではなく、新しい入門者たち、特に、入門はしたもののいまだ国学にくらい者たちを啓蒙する目的をも兼ね備えていたのであった。次にひく二通の書簡（史料②③）は、彼らのそうした自主的な平田学学習会の様子を窺わせる内容である。

史料②嘉永三年三月二十四日　熊谷常蔵（直養）差出、鋏胤宛書簡[34]より

扨又先頃村井政儀より願申上候節、当地進学之輩七人御入門願申上候処、早速御聞届被下、難有御義奉存候、此度、誓文差上申候間、御収納被下、以来は何分御取立被下候様、奉願上候、右之内私兼て儒学取立置候輩も有之候故、古道之義も政儀と申会、乍不及取進め添心仕度奉存候、先は篤き輩ニ御座候とも故大人之御篇書などもいまだ染々拝閲仕不申候簇ニ有之候故、段々出精致させ候様ニ取進め申度候、兎角数多之人数なれば、相競ひ候ニ気も出来はけミにも相成候事故、誠ニ大悦罷在申候

史料③嘉永三年正月五日　村井久太郎差出、鋏胤宛書簡[35]より

序ながら奉申上候、同志申会時春より宮比講相企いたしか、掛銭もちより仕、大凡壱人前ニ付一ケ年分金弐歩ニて弐両弐歩向キも都合ニ相成申候、今年よりハ今少し出精持寄申義、咄合罷在申候

史料②・③はともに、秋田の能代という地域における平田門人が、江戸の鋏胤にあてた書簡である。②では門人熊谷常蔵が、入門者を獲得したものの、中にはいまだ儒学に熱心な者もいるので、自ら率先して平田学を学ばせようと努めている、と語っている。つまり書物を使った啓蒙活動をしているという内容である。先に篤胤生前の講釈会参加者は漢学的教養を基礎にもつ藩士たちが中心であり、篤胤はそのことを意識した講釈をしていたと述べた。だが篤胤没後に至っても、やはり気吹舎の重要な課題は入門者達の根底にある儒学偏重傾向を改めさせることだったようだ。

また史料③からは「宮比講」すなわち宮比神を信仰する会をつくり、そこで金銭を集め江戸の気吹舎へ上木資金の足しにと送っていることが分かる。平田学ならではの祭祀実践を組織的におこなっている様子が窺えよう。史料②・③双方とも、代表者が会を組織し周辺の門人達をまとめたり教育したりしているのが特徴的である。

このように、篤胤が亡くなった後の秋田における気吹舎門人たちは、独自のグループをつくり、気吹舎の上木資金支援をおこない、江戸から書物を取り寄せて主体的に学問やそれに伴う祭祀の実践を続けていたほか、儒学的な要素がいまだぬけきれない新しい門人達に対して、啓蒙・教育

活動をおこなっていたのである。

四、『古学二千文』の刊行

さてこのような秋田における平田門人コミュニティーの存在は、気吹舎蔵板本『古学二千文』の出版を考える際にも重要になってくる。それは本書が、複数の秋田門人による助成金によって刊行されているからである。秋田の平田門人と本書との関係を明らかにするため、成立に関する略年譜を作成した[36]。

『古学二千文』成立に関する略年譜

天保二年十月～同七年十月頃、生田万『古学二千文』完成か（『生田万・荒井静野（館林郷土叢書第二輯）』）
天保八年六月、生田万、越後柏崎で蜂起、死去
天保十二年一月、平田篤胤、著述差し止め、秋田へ退去
天保十四年六月、銕胤、秋田へ
天保十四年閏九月、篤胤死去
嘉永二年一月、『古学二千文』菅原豊秋跋文（「渋江光世主の思ひ起して彫初め給へるに魂合つゝ、共々に費を助けてかくは為たるになむ」）
嘉永二年秋、『古学二千文』三谷重緒序文
嘉永二年十二月、徳川家斉第七回忌によって篤胤赦免
嘉永三年五～九月、銕胤秋田旅行
嘉永五年六月廿日、秋田門人、小笠原見龍より金山類・二千文板木等到来（『気吹舎日記』）
嘉永五年六月、『古学二千文』刊（『蔵板物覚』）

『古学二千文』は気吹舎蔵板であるが、著者は篤胤ではなく気吹舎門人であった生田万であり、太田在住時代に草稿を完成させたのではないかと言われている。その後、生田万は天保八年に越後で蜂起し、また篤胤も同十一年十二月に著述差し止めの刑を受けるという事態がおこる。本書に刊行予定があったかどうかは不明であるが、いずれにせよ出版は不可能な状況が続いてきた。そして実際に刊行されたのは嘉永二年である。略年譜には嘉永五年に刊としたが、これについては少し注意すべきことがある。

略年譜をみると、本書は嘉永二年の一月と、同じ年の秋に序跋がつけられている。そこには秋田の門人同士で資金を出し合い上木した旨が書かれている。ところが、平田家に伝わった史料『蔵版物覚』（気吹舎刊行物全ての出版年を記載した史料）には嘉永五年六月に刊行されたとある。つまり『蔵板物覚』に記されている刊年と、『古学二千文』跋文にある年号とにひらきがあるのだ。これについて『気吹舎日記』嘉永五年六月二十日の記述をみると、秋田から『古学二千文』の板木が、気吹舎へ来たことが記載されて

いる。よっておそらく、『蔵版物覚』にある年月は、気吹舎が『古学二千文』の板木を所有した年なのだと考えられる。板木が秋田から江戸へ送られてきたということは、『古学二千文』は嘉永二年に秋田ですでに板に彫られていたといってよいだろう。

この事実からは、その背後にやはり秋田における平田門人コミュニティーを想像させる。つまり秋田で平田学を学ぶテキストとしての必要性から、嘉永二年に秋田で、門人達の手によって上木資金が集められ板木に彫られるといった、積極的な出版支援が行われたのだと考えられるのである。

五、テキストとしての『古学二千文』

では『古学二千文』はそもそもどんな性格をもち、誰を対象に書かれた本なのであろうか。著者である生田万が本書を著した際に、その動機や抱負などを語った「国秀ぬしより遺されたる文」[37]という一文がある。

それによると、『古学二千文』は、生田万が本書を著した動機とは、国学指導をしていた際に感じた次のようなことであった。すなわち、同じく古学を学ぶ者には漢才がない。一方、儒仏を唱える者は、かな文字というだけで手に取ろうとしないので彼らに古学を浸透させられない。よって、『千字文』の如く韻をふんだ漢文で、天地の成り立ちからいわゆる神の代、天皇の御世、それから国学のおこりなどの古学を学ぶことのできる内容を著すことで、双方の足りないところを満たそうということなのであった。特に「古史伝や太古伝の嚆矢として、其奥所に引入るべく、言を残し置て儒仏等の群中へ打散し」と、対象となるのが「儒仏等」であること、また『古史伝』『太古伝』を学ぶ前段階の啓蒙を目的とするという設定がなされていることは重要である。

ところで生田万は、この『古学二千文』の前身となったものを子供に説いたとしており、その後、本書が初学者向けの素読テキストとして扱われたということは「皇学所規則」などの記事[38]からも明かである。

ただし、『古学二千文』の板本には二種類あるということを注意しておかねばなるまい。一つは「読み下し文」がついていない版であり、もう一つは万延元年に門人がつけた「読み下し文」が巻末に附されたものである。初学者向けとなったのはおそらくこの「読み下し文」付きの万延元年版である。

よって、秋田で彫られた嘉永二年当初は、当然原文のみの状態であった。この読み下しのない本文だけの状態のも

のが寺子屋で学ぶようなまったくの初学者向けであったとは、いえないであろう。この読み下しを付けた門人宮本芳郡の跋文には次のようにある。

史料④「古学二千文」の読み下しの跋文[39]より（傍線は筆者による）

然レバ生田主ノ此書ハモ、二千四百餘文サヘ有テ、実ニ世ニ珍ラシク、貴ムベキ物ニゾ有ケル、サルヲ己ガゴト、未ダシキ者等ハ、常ニ目ナレザル文字の多カルニ、思ヒ惑ヒテ、其事実ニ乖ヘル非訓モ少カラヌハ、心苦シキ業ニゾ有ケル、故コタビ一リ二リ友ダチ相議リテ、コレガ訓法を定メ其ヲ直ニ本ツ字ノ傍ニ彫付テ童蒙ノ便リト為ムハ如何ト師家ニ乞申セルヲ、ソレ甚善ケムト、宣ハスマヽニ斯クナム、但シ此書、元ヨリ音訓打交リニ書キ成セル物ニテ、悉ク古言ニノミハ読得ベカラズ、ナホ読誤レルモ有ルベケレド、其ハ次々ニ改ムベク、見出給ハム人々、告オコシ給ヒテヨ、カク申スハ相模ノ国雨降ノ神ノ社ニ仕ヘ奉ル宮本ノ芳郡

万延元年十二月

この雨降（阿夫利）神社の宮本とは、幕末に気吹舎の本を一般向けに売る取次所の役割を負っていた人物である。[40]そのような立場から読者の需要に敏感であったのかもしれないが、『古学二千文』に「読み下し文」を付けるにあたり「目ナレザル字」が多く、間違えて読むことが少なからずある、また、自分が読み下しをつけても間違っているものもあるだろうとしている。つまり、原文のみでは初学者にとっては使いづらいテキストであったといえるのである。

この読み下し文がついていない状態の『古学二千文』を使用していた秋田の平田一派は、やはりある程度漢文の素養があったといえる。反対に、秋田で本書が刊行された目的とは、本書が国学に暗い漢学者を啓蒙するために書かれたものであるということと無関係ではないだろう。つまり、先に史料②として能代の平田門人が、なお儒学を重視する新参の門人に対して国学的知識を啓蒙している内容の書簡をあげたが、『古学二千文』の刊行も、やはりこのような漢学がベースにある門人たちに対する啓蒙活動の一環であったのではないかと考えられるのである。

このような漢学的基礎教養が根本にある者へ、いわば歩み寄りつつ啓蒙するといった努力は、篤胤没後の秋田においても惜しまずおこなわれたようである。次にひく史料⑤は嘉永三年に鋏胤が秋田へ赴いた際の日記を抜粋したものであるが、ここに記されている鋏胤の講釈内容からもその努力が窺える。

史料⑤嘉永三年鋏胤秋田行日記[41]より（括弧・傍線は筆者による）

（嘉永三年七月）朔日、天気、今朝より講釈はじめ（熊谷

常蔵方）、古史伝初段、昼過、玉襷板本之外幷ニ漢学の大意うち交へ毎日朝夕二度ツ、講談

（同年同月）十六日、今日より十日の間、毎日昼後講釈、当家（鹿渡村川村宅）表座敷にて也、古史伝初より一段ツ、玉襷板本之外也、聴衆、御主人、梅津殿、荒川殿父子、八木氏、小野岡茂吉殿、渋江豊吉、吉川久治、新田目転、大山与三左衛門、太田喜右衛門、駒木根又左衛門、淀川渡、鯨岡内蔵允、羽石文輔、小笠原見龍、小野岡操助、当家家来中五六人、妹尾玄養、岩谷芳剛、菅井正八、野上八郎右衛門、小谷部甚左衛門、桜田又治、渋江庄治、大和田正治

（同年八月）三日、主人佐藤美濃広載、同息日向広成入門、昼後講談、漢学大意也、宮津志摩重頼入門、当藩軽輩のよし、佐々木清八入門願ニ付、実名清綱とつく、須田河内重成入門、横手より来住之由

傍線を附した箇所の中で、銕胤が秋田門人に向けて『漢学大意』を、篤胤の代表作である『古史伝』『玉襷』に交えて講義していることに注目したい。『漢学大意』とはおそらく篤胤の著書『西籍概論』のことであり、漢学の概要を述べた上での儒者批判である。あえてこの講義内容を選んでいるところからも、もともとこの地における平田門人たちに、漢学を基礎的に学んできた経緯があり、そのような門人達の儒学偏重的な先入観、いわゆる「なまからごころ」を払拭し、彼らの中に完全に平田学を浸透させるための意図的な講釈内容であるといえるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、気吹舎全体の「書物」「出版」について社会史的解明を目指す枠組みの中で特に平田篤胤逝去前後の様相について述べてきた。篤胤が秋田に下った当初、当地の学問は総じて漢学が主流であり、藩校教育としての和学は衰退しつつあった。そんな中、篤胤の講義を聴きに集まったのは上流藩士を中心とし、漢学を主とした教養のある人物達であった（六郷は神職中心だが、久保田藩士たちとも繋がりあり）。師篤胤が亡くなり、銕胤までもが江戸へ帰ってしまった「寂莫と」した状況下、篤胤生前の講義に参加していた門人たちが中心となって、平田学振興のための活動を続けていく。初学者向けテキストである『古道大意』を初めとする著書の出版資金助成や、取次者が江戸からまとめて気吹舎の本を買い、独自に平田学を摂取していったほか、のちにグループをつくり自主的な勉強会や祭祀の実践をおこない、入門してもなお「儒学取立置候輩」を教育するといった啓蒙活動を続けた。

一方「古学二千文」は、生田万の著書であり、それまで生田万の乱や篤胤の著述差し止め、あるいは金銭的な理由から出版はされてこなかった。だが篤胤没後、漢学的な教養をベースとする門人達を啓蒙する必要性から、彼らに向けた儒学の「千字文」に代わる国学の体系的なテキストとして、秋田の代表門人達の手で資金が集められ板木に彫られることとなる（秋田にて摺立されたかどうかは不明）。本書は、後に読み下しをつけられ広く流布することになるが、当初、読み下しがついていなかったことからも、その使用者たち、あるいは上木の必要性を感じ助成した代表門人達、双方の漢学的素養を窺わせる。また、嘉永三年の鉄胤旅日記にある講義内容からは、やはり門人達に対する漢学偏重の思考を改めさせようという意図がよみとれる。

秋田に於ける平田門人達による活動は、江戸からの書物購入、或いは出版助成といった行為をとおしておこなわれた、積極的な平田学摂取であり、漢学的教養をベースとする門人達への啓蒙活動であったのである。主要門人達によるそのような自主的な活動こそが、大友直枝が和学振興を目指しつつも振るわなかった当地において、平田学を浸透させる大きな原動力となったのだといえよう。

注

（1）気吹舎刊行書籍のうち三分の二以上は篤胤没後に刊行された。「平田塾刊本目録」『特別企画 明治維新と平田国学』（国立歴史民俗博物館、二〇〇四年九月）七三頁。

（2）本稿の全体的枠組みに繋がる拙稿として、吉田麻子「国学者平田篤胤の著書とその広がり」『第二十八回国際日本文学研究集会会議録 教養としての古典—過去・現在・未来—』（国文学研究資料館、二〇〇五年三月）あるいは「平田篤胤『古今妖魅考』の出版事情」（『書物・出版と社会変容』第一号、二〇〇六年四月）などがある。他に気吹舎の出版を社会史的にとらえた研究として、宮地正人「伊吹廼舎と四千の門弟たち」『別冊太陽 知のネットワークの先覚者 平田篤胤』、（平凡社、二〇〇四年五月）や、遠藤潤「幕末社会と宗教的復古運動—白川家と平田国学 古川躬行を焦点として—」（『國學院大學日本文化研究所紀要』八三号、一九九九年三月）などがある。

（3）渡辺金造「篤胤の晩年」（『平田篤胤研究』、六甲書房、一九四二年十二月）。

（4）「門人姓名録」（『新修平田篤胤全集』別巻、名著出版、一九八一年）参照。

（5）桐原善雄『平田篤胤と秋田乃門人』（文芸社、二〇〇一年）付録を参照。

（6）先行の国学史研究として参照したのは以下の通り。桐

原善雄『平田篤胤と秋田乃門人』（前掲）・渡辺綱次郎『近世秋田の学問と文化―和学編―』（一九九九年）・『秋田市史（中）』（一九七五年）『秋田市史』第三巻近世通史編（二〇〇三年）・『秋田県史』第三巻近世編下（一九六五年）・加藤民夫『明徳館の研究』（一九九七年、カッパプラン歴史文庫）。

（7）『秋田県史』（前掲）では嘉永四年に平田門人が和学方振興についての上申をおこない、その頃から吉川忠行が中心となり鈴屋門流的な古典的教養を深める傾向から篤胤の影響をもって復古主義の傾向へとむかい、藩士達へも浸透していき、秋田の尊攘運動へと繋がったとする。『秋田市史』（前掲、二〇〇三年）でも門弟達が「いつの間にか」平田学を「それぞれの理論に加えていった」とし、門人達の学問的活動についてはふれていないが、「吉川忠安・平田延胤に代表される朝廷を上に戴く政権構想」と「大縄織衛や平元謹斎に代表される徳川・諸侯連合政権を構想する思想」が藩内で激しく対立しつつ東北戊辰戦争へと突き進んだとの指摘を加える（四〇二頁）。桐原善雄『平田篤胤と秋田乃門人』（前掲）では、「一連の流れをリレーにたとえるなら、スタートを切ったのは平田篤胤、門人大友直枝で、中間の走者は平田門人、本居門の吉川忠行、忠安一門で、テープを切ったのは吉川門生、雷風義塾員、維新館の面々とするのが至当ではないか」（六〇頁）と述べ、篤胤没後から吉川忠行が私塾を立ち上げるまでの平田門人の活動の意義を指摘するが、具体的な検討はなされていない。

（8）『秋田県史』（前掲）六五五頁。

（9）表①は「気吹廼舎御会日出席帳」（国立歴史民俗博物館蔵、平田篤胤関係資料、冊子3）、表②は「於仙北郡大巻邑二世伊吹廼舎大人御講説出席帳」（同）より、それぞれ作成した。①②ともに、二回以上出席が確認される名前のみを掲載。表①の備考は、注（10）～（18）および備考中（　）内にあげた文献の他、『気吹舎門人姓名録』（前掲）・渡辺金造『平田篤胤研究』（前掲）・煙山英俊「「渋江和光日記」小考」（『秋田県公文書館 研究紀要』一九九九年三月）を参照。なお、「歴博書簡」とあるのは国立歴史民俗博物館、平田篤胤関係資料の「書簡」のこと。また、桐原善雄『平田篤胤と秋田乃門人』（前掲）では、秋田藩における門人帳に記載されていない（記載漏れ）門人の存在を指摘している。確かにこの表には門人帳に名前がみえないものの、熱心に講釈会に通っていた人物もおり、今後も調査が必要である。

（10）『秋田人名大辞典』（秋田魁新報社、一九七四年）。

（11）菊池保男「秋田藩上級武士の読書活動―「渋江和光日記」を史料として―」（『秋田県公文書館 研究紀要』二〇〇六年三月）。

（12）『秋田人名大辞典』（前掲）。

(13) 『秋田人名大辞典』（前掲）。
(14) 『秋田人名大辞典』（前掲）。
(15) 加藤民夫『明徳館の研究』（前掲）一九六頁。
(16) 桐原善雄『平田篤胤と秋田乃門人』（前掲）四三～四四頁。
(17) 『秋田人名大辞典』（前掲）。
(18) 『日本教育史資料』第八巻（文部省編、一八九二年）。
(19) 『古学二千文』の出版事情については後述。
(20) 国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、書簡5-1-8。
(21) 『門人姓名録』（前掲）。
(22) 国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、書簡16-92-16。
(23) 『秋田市史』（前掲、一〇〇三年六月）。
(24) 『六郷町史』下巻文化編（前掲）三八六～三八七頁。
(25) 『秋田県史 文芸・教学編』（一九六一年三月）五六二頁、五七二頁。
(26) 表中にあげたもの以外に『五十音議訣』（天保十三年九月十六日付書簡、渡辺金造『平田篤胤研究』七三五頁）もあげられるが、この場合は定期的におこなわれた講釈とは別の特定の門人に対しておこなったものである。また渡辺金造「篤胤の晩年」（前掲）にもあるように『万葉集』の会読も定期的におこなわれた。なお、根拠とした史料の欄に記した番号は「巫学談弊」以外は全て国立歴史民俗博物館所蔵、平田篤胤関係資料の「書簡」の請求番号（と年月日）である。
(27) 吉田麻子「平田篤胤の常陸・下総訪問―文化十三年『かぐしま日記』と文政二年『二度の鹿嶋立』を中心に―」（『近世文芸 研究と評論』第五十六号・一九九九年六月）参照。
(28) 根拠とした史料の欄には、国立歴史民俗博物館所蔵、平田篤胤関係資料の「書簡」の請求番号と、その書簡の年月日を（ ）で記した。
(29) 『宮比神御伝記御肖像』および気吹舎の摺り物については松本久史「維新期平田派国学と民俗信仰―『宮比神』神像画を例にして―」（『荷田春満の国学と神道史』弘文堂、二〇〇五年）参照。
(30) 天保十二年二月十二日付の篤胤差出、鋏胤宛書簡（渡辺金造『平田篤胤研究』五四二～五四三頁）に『太元図』送付を請いた後「兎角ミヤゲモノハ成丈蔵板もの丶方が得であらうと思ふはいかゞ」とある。また表中、『巫学談弊（俗神道大意）』は、神仏習合に対する批判であり、同時に神道界を牛耳っていた吉田家批判である。これについては今のところ結論が出ないが、秋田の神道のあり方との関係などを今後調査すべきであろう。
(31) 国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、書簡16-92-16。

(32) 『金銀入覚帳』(国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、冊子2-1)。
(33) 『気吹舎日記』(国立歴史民俗博物館蔵平田家資料、冊子1-21)。
(34) 国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、書簡15-1-23。
(35) 国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、書簡15-1-22。
(36) 略年譜を作成するにあたって参照した文献は以下の通り。『特別企画 明治維新と平田国学』(国立歴史民俗博物館、二〇〇四年九月)七二頁、『生田万・荒井静野(館林郷土叢書第二輯)』(館林郷土史談会、一九三六年)、『気吹舎日記』(国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、冊子1-22)、『蔵板物覚』(国立歴史民俗博物館蔵平田篤胤関係資料、冊子11)、『古学二千文』(早稲田大学図書館蔵本、〈18 3147)。
(37) 「国秀ぬしより申遣されたる文」(太田金山図書館蔵『古学二千文略解』に添付)、『生田万・荒井静野』(前掲)。
(38) 『日本教育史資料』第八巻(文部省編、一八九三年)一四七頁。
(39) 早稲田大学図書館蔵本(〈18 3147)による。
(40) 吉田麻子「国学者平田篤胤の著書とその広がり」(前掲)。
(41) 『嘉永三年鍈胤秋田行日記』(宮地正人編「平田国学の再検討(一)」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一二八集、二〇〇六年三月)。

(相模女子大学非常勤講師)